

「日本らしさ」に気付くためのICTによる主体的な学びの実践

光明学園相模原高等学校 教諭 笹原 健司

実践の概要

海外の修学旅行中に、現地で約400名の生徒がホストファミリーに対して「日本らしさ」を英語でプレゼンテーションするため、学習者の「気付き」から「発表」「記録」までをeポートフォリオとコラボレーションシステムを使って教科横断型の学習活動を行った。

1. 目的・目標

教科を横断による深い学びと自己肯定感を育む日本らしさの探求

学校行事（修学旅行）による体験学習および教科情報のプレゼンテーション学習、英語会話の英会話をつないで深く連続性のある学びを実践し、学習と社会のつながりを認知すること。さらに「日本らしさ」をテーマにして、自国の文化・精神を知ること、日本人としての素晴らしさに気付き、自らの自己肯定感の高揚を目指すことを目指した。

2. 実践内容

電子ポートフォリオを使った教科横断型の学習

学習は「社会と情報」から「英語会話」へ連続して実施した。実践活動においては「家庭科」や学外の支援者にも一部協力を頂いた。このような「連続性」と「広域性」を接続させるため、学習者の様々な「学び」や「情報」を一元管理する必要がある。使用したシステムは、Google社のG SuiteとClassroomである。機器に依存しないWebアプリを使って学習から発表・記録までをClassroomに登録した。前提条件として、生徒は入学時にG SuiteシステムのIDを提供され、教科情報においてChromebookを使用して授業が行われている。また、個人のスマホを「学びの道具」として利用を推奨している。



写真1 スライド作成

1年生の11月以降、調べた情報や実践して得た情報をClassroomにすべて記録する。情報をプレゼンアプリ（googleスライドを使用）にまとめていく。4、5名のチームでスライドをクラウド上に共有し、対面またはオンライン上でそれぞれが役割分担してスライドを作成した（コラボレート学習（写真1））。作成したスライドは、ルーブリックを使って評価・フィードバックを行った。

学習活動から得られる「気付き」「疑問」「提案」はデジタルノート（googleドキュメント）にすべて記録した（リミッツペーパー）。「問い」や「疑問」はClassroom内で共有し、必要に応じてスクリーンも使用した（ピアインストラクション）。

現地発表ではiPadなど電子機器を使うチームと印刷物で発表するチームがあった。作成したスライドはボタン一つでWebへの公開・非公開ができるので、プレゼン中はスマホを見ながら紹介するチームが多かった。日本に戻り記録した動画、写真をClassroomに提出した。この記録が更に学びを再構成する情報となり、生涯学習の記録となる。

【本時の学習内容】

- 指導目標／プレゼンテーションによって身に付けたい力を自ら選択し、学習活動に反映する。プレゼンテーションとは何かを具体的に知る。
- 評価／学内ではルーブリックによる自己と他社評価。修学旅行では4点法による自己評価とアンケートによる評価

【指導略案】

- 単元指導計画（全体時間約18時間）
- (1) 社会と情報（「日本らしさ」について調べ学習）（4時間）
- (2) 社会と情報（プレゼンテーションとは）（2時間）
- (3) 社会と情報（「日本らしさ」リハーサルからポスタツァー）（4時間）
- (4) 英語会話（プレゼンの英文化）（4時間）
- (5) 英語会話（スピーチ・トレーニング）（4時間）
- (6) 現地発表（webによる学習教材の接続）（約2時間）
- 本時の目標と展開 平成28年11月 児童数38名
- ・「わかりやすい」情報表現ができる。
- ・「伝わる」情報を作成できる。
- ・「聞き手」に合わせたプレゼンができる。

学習活動	子供活動	指導上の留意点
導入 社会が求める力 AI時代の働き方	「企業の採用時のアンケート」を見て、どんな力が必要か考える	身に付けたい力は自分自身で決める事。意志ある学びを意識させる。
座学 分かりやすい情報表現について（目的・対象・工夫）	実際のスライドを見て違いを認識する。	プレゼンを3つの段階に分けて考える。 1 説明する 2 納得させる 3 行動を起こす
座学 プレゼンの要素について（内容と表現）	ここまでの学習を気付きをリミッツペーパーに記入	本時の学びの確認 頭と感情に伝える。
実習 リアルデータの登録・スライド作成	取材データのクラウド登録、プレゼンスライドの共有	目的と目標を考えてスライドを作成する。

3. 成果



写真2 スライド

学習を進めていく中で、学びの姿勢に変化を感じた。対面で質問しても、手が上がらなかったり、回答がなかったりする「問い」でも、LINEなどで慣れているからなのか、SNS型の質問システム（クリッカーやコメントフォーム）には、多くの気付きや意見を記入する。良いかどうかは別として発信に積極的になる。修正が容易なことから「とりあえずやってみる」といったチャレンジする場面が多くなった。

スライド（写真2）は共有して作成すると、お互いの意思がタイムリーに確認できるため、常にフィードバックしながら作成が進んでいく。

実施後は複数の観点についてアンケートと自己評価により確認した。各質問に対して「よくできた・できた・できない・まったくできない」の4点法で実施。「よくできた・できた」を肯定的な回答として集計した。

アンケートでは、プレゼンテーション実施について、伝えたいことが伝えられたか（肯定 88%）プレゼンテーションの準備は十分だったか（肯定 92%）ファミリーの満足度（肯定 94%）など、実施効果は高いと感じている。



写真3 「オーストラリアと日本の教育制度」スライド

さらに現地での発表を基に、「今後学内で修学旅行での体験を発信してみたいか」といった質問について約70名の学生が yes と答えた。制約のない中で自ら表現したいと思った主体的な生徒の数だ。その中で、オーストラリアと日本の教育制度（写真3）について発表した生徒によれば、現地の学生と情報交換したことで、日本の語学教育に疑問を持ち、帰国後調べた結果、異文化理解・

多文化交流のために語学が必要だったことを再認識し、日本の英語教育の問題点を発表した。自己評価では、目標に合わせて8分野22項目の観点で評価し、分野別に集計した。

表1 質問項目

観点	質問項目
意思決定	人とは異なる意見でも、自分の考えを状況に応じて伝えることができた。
意思決定	自分の考えに責任を持ち、自分がすべきことを決定できた。
課題設定	旅行中「知りたいな」と思うことや「不思議だな、なぜだろう」と思うことがあった。
課題設定	何が分からないことや困ったことがあった時に、どこに問題があるかを考えることができた。
課題設定	課題解決の道筋を予測し、課題を解決するための計画を立てることができた。
協同	話し合いのときに、班の意見をまとめることができた。
協同	お互いの良いところや違いを認め、協力することができた。
協同	異なる意見から得た気付きを生かして、考えを発展させることができた。
計画実行	課題解決に向けて、見直しをもって行動できた。
計画実行	自分の役割を自覚し、計画的に行動できた。
計画実行	失敗しても、もう一度挑戦し、最後までやり遂げた。
思考判断	収集した情報を関連づけて、比較したり、推測したりして考えを広げることができた。
思考判断	課題の原因や状況等を理解して、自分の考えを持つことができた。
思考判断	課題を解決するときに、何から始めれば良いか優先順位を付けることができた。
収集分析	解決したいことを、書籍やインターネット等を使って調べることができた。
収集分析	解決したいことを、電話やメール、インタビューでたずねることができた。
収集分析	収集した情報が正しいかどうかについて考えることができた。
収集分析	課題の解決に役立つ情報かどうかを考えながら、情報を集めることができた。
他社理解	異なる立場や考えを受け入れ、理解しようと思った。
他社理解	異なる立場や考え方の良いところを見つけることができた。
表現省察	相手や目的に合わせて、自分の考えを、根拠を明確に整理して表現することができる。
表現省察	学習の仕方や進め方を振り返り、次の学習や生活に生かすことができる。

※質問項目を優先させたため、個々の数値は削除。集計結果は次の通り

- ・意思決定を問う質問（肯定 92%）
- ・共同性を問う質問（肯定 90%）
- ・他者理解を問う質問（肯定 95%）
- ・表現省察を問う質問（肯定 95%）

「身に付けたい力は自分で選ぶ」最初に生徒自身が目標をたててから始めたプログラムだ。自己評価では概ね達成できたと感じているようだ。

学習活動としても「主体的・対話的で深い学び」を実践できたと感じている。

4. 今後に向けて

ICTを学習に利用する手段は多くあるが、システム（アプリ）をそのまま使うだけでは、学習活動で深い学びが生まれるとは思えない。教師自身が学習に合わせて「深い学び」を作り出そうと思いながらICTを活用することが、生徒の主体的な学びにつながると感じる。この学習に関わった教師は、活動を通してシステムを習熟し、それぞれがオリジナルな学習システムの開発にチャレンジしたいと感じたようだ。

生徒が主体的に学ぶには、教師が創造的であること。このような事例を Classroom に登録し、他校とも接続しながら広く学習コンテンツを開発したい。

また、社会教育者との協業やAIを使用した教育システムもどんどん広がっていくだろう。一人の学習者に多くの教育の機会が提供される時代となった。「学び」をもれなく記録し、生涯学習に利用できるように、eポートフォリオによる学習記録の環境を整えていきたい。